

◎アジアの植民地化と民族運動の高まり a.東南アジアの植民地化と抵抗(2)

⑧ベトナム

1859 フランス([1ナポレオン3世])は阮朝の[2カトリック宣教師]迫害を介入をすすめる
→ベトナム南部(1862)を植民地、[3カンボジア](1863)を保護国化(サイゴン条約)

これにたいし、[4劉永福]率いる黒旗軍、抵抗運動をすすめる

1884、ユエ条約 ベトナム北部・中部も支配下に←→[5清]、宗主権を主張

1884~85 [6清仏戦争]で清を破る…天津条約=ベトナムの仏の[7保護権]承認
→1887仏領[8インドシナ]連邦成立、のち[9ラオス]も編入

1904[10ファン=ボイ=チャウ]ら[11維新]会結成
→[12トンズー(東遊)]運動(日本留学運動)をおこす→1912年ベトナム光復会を結成

19世紀にはいると[13フランス]人宣教師ピニョーの援助を受けた[14阮福映]が西山党をおさえて[15阮]朝をたてた。これ以後、この地にはフランスの影響力が拡大していく。1859年、[16ナポレオン3世]下のフランスは宣教師の迫害を口実にベトナム南部を占領・植民地とし、つづいて[17カンボジア]も植民地に組み込み、1884年にはベトナム自体を保護国とし、これに反発する[18清]を[19清仏]戦争で破った。こうして1887年には仏領[20インドシナ]連邦が成立した。

◎ 東南アジア近代史のまとめ

地域(国名)	宗主国	重要人物・事件など
インド	イギリス	独立運動の中心(インド国民会議) = ガンディー、ネルーなど
インドネシア	21オランダ	19世紀の植民政策 = [22強制栽培]制度 独立運動の指導者 = [23スカルノ] (インドネシア国民党)
マレー半島	24 イギリス	
25 フィリピン	スペイン →アメリカ	[26米西]戦争をきっかけに奪われる 独立運動の指導者 = [27ホセ=リサール][28アギナルド]
ミャンマ(ビルマ)	29 イギリス	独立運動の指導者 = アウンサン
ベトナム	31フランス	トンズー運動(日本留学運動)…指導者[30ファン=ボイ=チャウ]
カンボジア		独立運動の指導者 = ホーチミン
ラオス		
タイ		独立を維持 国王 = モンクット王(ラーマ4世) [32チュラロンコン]大王(ラーマ5世)

d. インドにおける民族運動の高まり

①イギリス支配

イギリスによる開発の進行 = 綿花・茶・コーヒーなど[33商品作物]生産や[34鉄道]建設
→イギリスの利益を優先する[35植民地]経済の進展 = インド民衆の生活向上とは無縁

教育制度の充実など近代化政策 → [36知識人]階級の増加、[37民族資本家]階級の成長
→政治、社会、経済上の不合理から[38民族の自治]を求める[39民族]運動発生

②1885年[40インド国民会議]を結成

= 中心は[41親イギリス]的な知識人([42ヒンドゥー]教徒が多い)や地主・商人
→しだいに[43反イギリス]傾向を強め、イギリスへの批判を強める。

③1905年イギリス[44ベンガル分割法]を發し[45宗教対立]を利用し運動の分裂をはかる。

→1906 国民会議、[46カルカッタ]大会で四綱領を採択し抵抗
=[47スワラージ(自治)]、[48スワデーシ(国産品愛用)]、民族教育、英商品ボイコット

→1906 親英派イスラム教徒に[49全インド=ムスリム連盟]を結成させ、国民会議と対抗
1911年ベンガル分割令を撤回

イギリスは1885年インドの民族資本家や知識人の懐柔を目的に[50インド国民会議]を結成した。しかししだいにイギリスへの抵抗の姿勢を明らかにし、1905年、ベンガル州の宗教対立を利用して運動分裂をおこす目的でされた[51ベンガル分割]法にたいし国民会議は[52スワラージ][53スワデーシ]などからなる4綱領を決議し、激しく抵抗した。これにたいしイスラム教徒は1906年[54全インド=ムスリム]連盟を創設、ベンガル分割を支持し、国民会議と対立した。

①第1次大戦…イギリスはインドへ55自治権を与えることを約束、戦争への協力を得る

イギリス側の約束不履行、[56ローラット]法を制定 = 運動弾圧

②[57ガンディー]の指導下に[58非暴力不服従]運動を展開、ムスリム連盟も協力

③1920年代後半、国民会議左派[59ネルー]らの台頭 → 60 プールナスワラージを主張

完全な自治
→1929年、国民会議にラホール大会 → [61ガンディー]の指導下に[62塩の行進]を実施

④1935年[63新インド統治]法 → 各州の[64自治]拡大とインド連邦の成立を認める

第1次大戦のなかでインド資本主義が発達したことにもなつて民族資本が成長、労働者階級が増大した。大戦でイギリスが[65自治]を約束したにもかかわらず、戦後[66]法で民族運動をおさえようとしたため国民会議は[67ガンディー]の指導下に[68非暴力不服従]運動を展開した。1920年代後半になると[69ネルー]らは完全独立を主張、1929年国民会議は[70プールナ=スワラージ]の要求を決議、ガンディーは「塩の行進」を実施した。こうした動きのなかでイギリスは1935年[71新インド統治]法を可決、各州の自治とインド連邦の成立を認めた。